

「배회」 손홍규

2015 年 第 39 回 이산문학賞 優秀賞受賞作

2015. 12. 20 池口小織

【 作家 : 손홍규 (ソン・ホンギョ) 】

1975 年全羅北道전라북도生まれ。東国大学国語国文学科卒。2001 年「作家世界」にて新人賞を受賞し、デビュー。

:::小説集:::

『사람의 신화 (人の神話) 』 (2005)
『봉섭이 가라사대(ボンソビいわく)』 (2008)
『툼은 톼과 잤다 (トムはトムと寝た) 』 (2012)
『다정한 편견 (やさしい偏見) 』 (2015)

:::長編小説:::

『귀신의 시대 (鬼神の時代) 』 (2006)
『이슬람 정육점 (イスラム精肉店) 』 (2010)
『청년의사 장기려 (青年医師チャン・ギリョ) 』 (2012)
『서울』 (2014)

:::主な受賞歴:::

2008 年 제비꽃庶民小説賞 『봉섭이 가라사대 (ボンソビいわく) 』
2013 年 백신애文学賞 『툼은 톼과 잤다 (トムはトムと寝た) 』
2013 年 오영수文学賞 『배우가 된 노인 (俳優になった老人) 』

(参考 : 教保文庫, RIDI BOOK, NAVER 책 等)

【 徘徊 登場人物 】

彼 : 30 代後半。約半年前に息子を失う。妻と別居し、ワンルームで一人暮らし。

妻 : 息子を失い深い悲しみの中にある。息子の死に対し伯母に責任があると感じている。

息子 : 中学生の夏、英語キャンプに行き、命を落とす。

伯母 : ‘彼’ の伯母。70 歳。朝鮮戦争勃発翌年、彼の祖父に養女として引き取られる。19 歳で初めての妊娠をするも流産、28 歳で出産した子供を百日咳で失い、70 歳で想像妊娠をしている。亡霊が見える。自らの人生史として小説を残す。

息子の友達윤희 : 息子の事故を目撃した少女。

パクさん : 彼と妻の知り合い。長男を亡くした後、17 歳の次男を残しこの世を去る。

パクさん 次男 : 17 歳高校生。父が兄だけ愛していたのかもしれないと苦しむ。

【 あらすじ 】

① P. 246 ～P. 247 12 行目

彼はパクさんと、日暮れの早まる晩秋、足早に色づく一本の銀杏の木の下で、飲み屋の露店テーブル席に座り憂鬱な酒を飲みながら、なぜかこの席がパクさんとの最後になりそうな予感がする。

② P. 247 14 行目～P. 250 6 行目

酒の席からおよそ半月後、パクさんの葬儀の日、喪主をつとめたのは、発達障害を患った兄を亡くし、さらに父の葬儀までも任された、17歳のパクさんの次男だった。彼はその場で別居して二ヶ月ぶりに彼の妻に会う。彼も妻もパクさんが自殺だと察していた。

一人暮らしのワンルームに戻った彼は、妻の話によると想像妊娠したらしい伯母のことを考え眠れない。

③P. 250 8 行目～P. 255 7 行目

彼は息子の担任だった歴史教師と会うが、なにひとつ新しい事実を得られない。英語キャンプに行って命を落とした息子だが、それが事故だったのか、自殺だったのかと苦悩する彼ら夫婦の元に、息子がキャンプ参加前に予約送信した一通のメールが届く。事故として扱われた息子の死の真相を求め、夫婦は学校にいじめや暴力の有無など、調査を要求したが、答えが得られない。

④P. 255 9 行目～P. 259 3 行目

彼は息子の知り合いの少女とファストフード店で待ち合わせ、事故の日に見たことを問いかける。息子の最後について少女を問い詰めてしまった彼は、少女が自殺だと思言えなかったと涙を流す様子に、自分の卑劣さを感じ、席を立ち外に出る。彼は伯母の小説を代筆した息子の文章を思い出していた。

⑤P. 259 5 行目～P. 261 4 行目

その日記が書かれた日は、彼と彼の妻、そして息子の三人で雪の降る世宗路を歩いた日だった。両親の少し後ろから両親を見た息子は、彼らを雪のひとひらのような存在と認識し、人間とは卑しく惨めな存在でありながらも、崇高な存在であると考えたのだろうと、彼は感じる。店の外で雪の降る通りを眺めていた彼は、店内へと戻り、彼が出た時のそのままの姿勢できちんと座っていた少女に、悲しまなくていいと伝える。

⑥P. 251 6 行目～P. 264 11 行目

彼は息子の遺品から見つけた伯母の小説と、直接手渡された小説がずいぶん違うことを知る。祖母の法事が行われたある年の春の祭事の夜、伯母は夜道で亡霊を見たこと、その亡霊が伯母の母だったことを、祭事のためその場にきていた親族に打ち明ける。彼が伯母や両親から繰り返し聞かされてきた亡霊をみた伯母の話と、息子の日記とで違っていたのは、伯母が紡織工場の寄宿舎への帰り道に、実の兄の亡霊も見ていた部分だった。

⑦P. 264 13 行目～P. 266 19 行目

彼は、彼を訪ねてきたパク部長の次男と食堂に入り、ソルロンタンと焼酎を注文する。彼はパク部長と最後の酒の席で分かち合った話を全て少年に伝える。死など口にもしなかった父がなぜ自殺をしたのか混乱したままの少年は、実は兄を憎んでいたこと、父が兄だけ愛していたのではと考えたことを打ち明け涙を流すが、彼は慰めることもできない。

⑧P. 266 21 行目～P. 268 14 行目

彼が大学生となりソウルへ上京してきた頃、往十里で食堂を営む伯母を頼って暮らしていた。彼が結婚した頃から二十数年脱腸を抱えてきた伯母は、手術を拒み続けてきたが、彼の息子が英語キャンプに発つ前に手術を受ける。伯母が手術を無事終えた頃、息子の死が伝えられるが、伯母の恐ろしいほどの淡々とした態度に、滅多に本心をさらけださない彼の妻が怒りをあらわにする。

⑨P. 268 16 行目～P. 270 14 行目

彼の祖父が養女として引き取った伯母には、パルチザン(遊撃隊)だった兄がいた。その兄が8歳だった伯母の目の前で命を落と、さらに成長した伯母の前に亡霊となって現れたのは、辛いことだったろうと彼は感じる。眠る伯母の姿を見ながら、亡霊を見たことにより、うら寂しい日々を生きてきたであろう伯母の人生を思い、彼は伯母の部屋を後にする。

⑩P. 270 16 行目～P. 271 10 行目

彼は一週間ひたすら息子が日記で言及した場所をあてもなく探し回る。一貫して無秩序だった息子の日記から、息子が決して彼にも彼の妻にも話したことのない内面が垣間見え、そこから本来の息子を知ることはできても、息子の死と関わりある手がかりを見つけることは出来ない。

⑪P. 271 12 行目～P. 272 19 行目

彼は息子と関わりがあった人々に会うたびに、息子に近づく気分になれるのではなく、息子の周りを徘徊しながら、一步ずつ遠ざかっている気分になる。息子は日記で、父の通話を意図せず耳にしたこと、その内容から父が自分自身を押し殺しながら生きてきたのかもしれないと、息子が考えていたことを知る。

⑫P. 272 21 行目～P. 275

静まり返った伯母のアパートに入った彼は、誰かがひそひそと話すような声に気がつく。扉を開けると、怯えた顔の伯母が振り返る。眠ったとばかり思っていた伯母が、彼の名を呼び、どうしても帰るのかと問いかける。伯母の背後に息子がいるという言葉に、彼は一步も動けない。

【 補足 】

※빈소：喪中に亡くなった者の魂を祀る（安置する）場所。

※백일재：人が亡くなり 100 日目となる日にささげる供養。

※빨치산/遊撃隊：敵の背後で通信、交通施設等を破壊し、武器や物資を奪うなどの任命を遂行する非正規軍。特に韓国では 6・25 戦争前後に各地で活動した共産ゲリラを指す。

類義語：파르티잔

※고가농수로/高架農業用水路

【 感想 】

・家族や大切な人を自死で失った人々の出口のない苦痛と、生きる意味と死の理由を追い求める心情が丁寧に描かれており、生と背中合わせにある死が身近になった瞬間から、生きることの本質を追い求めさまよう主人公らの苦悩が伝わってきた。

・雪のひとひらが舞い降り、銀杏の葉が勢いよく散り行く描写には、人間の儂さや未熟さへの嘆きと、個々の人間の健気さへの慈しみが感じられた。

・伯母が鬼神（亡霊）を初めて見た時の描写では、小川のほとりの光景がはっきりと目に浮かび、人間以外の存在‘鬼神’に、人間の深層心理を垣間見るようで、現実離れたエピソードに、むしろリアリティを感じた。

【読書会での皆さんの感想など】

・‘歴史’に翻弄され、不幸な人生を送ってきた伯母の存在そのものに、韓国の歴史が垣間見える。逃れられない歴史観を感じる。伯母が孤児となった時期（6・25 戦争直後）を考えると、亡霊として出てくるパルチザンが、果たして実の兄の亡霊なのか、本当のパルチザンなのかはわからない。どことなく伯母には、慰安婦の姿が重なって見える。

・윤희は伯母の名前なのか？それとも息子の恋人だった少女の名前なのか？

→息子の恋人の名前である可能性が高い。

・伯母がまだ中学生であり純粋な息子に、聞かせるべきではない話をなぜ話したのか？

→歴史教師との話から、歴史に向き合う宿題に取り組む息子が、伯母に話を聞くことになったきっかけが見えてくる。中学生には手に負えないほどの内容であり、これにより息子は自ら命を絶つことになったのかもしれない。

・小説の中に小説がある（伯母の残したもの、息子のメールに添付されていたもの、息子の遺品から出てきたプリントされたもの）ことが難しかった。生と死の周りを徘徊する心情が伝わってきた。

・伯母の抱えてきたものを彼が引き受けることになる場面で、彼の拒否感が見える。

・伯母の想像妊娠の謎

→息子が亡くなった後、伯母のお腹が膨れ始め、ある程度まで膨らんだ後、息子が伯母と彼の前に亡霊として現れていることから、息子が手に負えないほどの話を聞かせてしまった伯母が、責任を感じ、息子の命をみずから宿し、時が満ちて彼の元へ別の姿で取り戻すという過程が描かれていたのではないか。